



発 行 所 松 高 校 新 聞 部 北 九 州 市 若 松 区 小 石 登 行 編 集 松 高 校 新 聞 部 印 刷 所 (有 限 公 司) (株) 高 塔 印 刷 (771) 2894

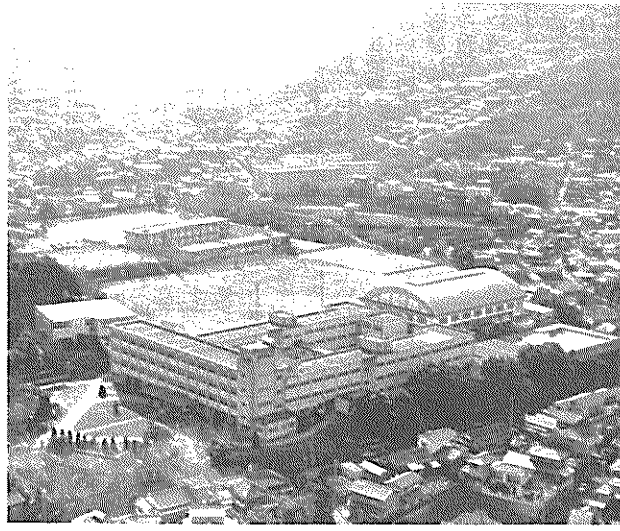
羽ばたく四二二人

第三五回卒業式挙行

昭和五十八年度若松高等 一〇時から挙行される。 学校卒業式は三月一日午前 ことし集立つのは男子

一九四四名、女子二二八名の 合計四二二二人。だが約三〇 名がいつの間にか卒業学年 から消失した現実がある。

卒業式では、国歌斉唱の あと、学校長から卒業証書 代表の青木一寿君に卒業証書 が手渡され、在校生を代表 して澤井慎治君(二年八組) が送辞を読み、芳賀直美さ んが若高三年間の思いをこ めて答辞を読み、安井仁志 君が、テント三張、冷兵器 二台、紅白幕一張の記念品 目録を学校に贈り、螢の光 の斉唱で終る。



一点の芳心

校長 仲 辰 巳

不羨青松百尺姿

県立下高の校長さんか ら約一年前、「うちの校長室 に掛けたある字が読めない のだが、いつか機会の折りに読んで頂きたい」と頼ま れてきたが、なかなかその 機会もなく打ち過ぎていた。 先般たまたまその方面に出 向く用件があったので立ち 寄って見た。

只縁一點芳心在

もの高きの青々と繁った松 の木の姿。

在校生から卒業生へのお饌別

卒業記念に瑞祥金牌

厭勝銭の系譜引く文鎮

ことしの卒業生には校章 入り金牌(写真参照)が贈 られる。これは一・二年生 が一人当たり一五〇円づつ 提出した卒業記念饌別で贈 られるもので、いつまでも 懐しの思い出が卒業生の心 に刻まれ、またこれをとり 出して見るたびに青春の活 力が蘇えるようにとの願い をこめて作られたもの。



は前漢(紀元前二〇二年) 後九年)時代の厭勝銭レブ リカを記念品に贈り、一般 市民の間で爆発的人気を 呼び、せひ分けて欲しい、 との申し込みが殺到したが、 ことしも今までの以上の記念 品で、永久に残るものにと 考えられたオランダのオ リジナル アイデアの品。

生指導部や生徒会役員 の希望をとり入れて、美 術の長先生がデザインし、 南部鉄器(若手県)の鑄造 元で製作された。

校章はカタカナの「ワ」 と「カ」を「高」に合わせ たもので、「ワカ高」を表わ している。

白銀の世界で

学年主任 久保山 十一

一、二、三月、四月、五月、六月、七月、八月、九月、十月、十一月、十二月、

二月二十六日から三十日 まで、四泊五日の「スキー 教室」が今年も無事に終了 した。出発前の数日は風邪 による欠席者が多かったの で心配していたが、意外に みんな元気な「白銀の世界」 に挑戦した。派手に転んで いたものの、実習三日目 とはなれば生徒はなかなら 上りまわると、どうしても一 時ごろになってしまっから 四日目は、休もうかと 思っていたが、せっかくなら ば、一日ならいいん だ、と決まらせた。三日、四 日目は、休もうかと 思っていたが、せっかくなら ば、一日ならいいん だ、と決まらせた。

煙草を吸って

いる人は自分が うることになるか 知らないで、た だ何となく吸っ ていると思う。

その大半は興味本位に、又 は友人に誘われて吸って いるうちに止められなくなり 一年、二年とするす る。吸い続けて、肺ガンや胃 ガンになり死んで行く。未 成年者のタバコの害は、学 校でその怖しさを十分教え べきだ。まわりの人も迷 惑する。シンナーについて も同じことが言える。

一月二十六日から三十日 まで、四泊五日の「スキー 教室」が今年も無事に終了 した。出発前の数日は風邪 による欠席者が多かったの で心配していたが、意外に みんな元気な「白銀の世界」 に挑戦した。派手に転んで いたものの、実習三日目 とはなれば生徒はなかなら 上りまわると、どうしても一 時ごろになってしまっから 四日目は、休もうかと 思っていたが、せっかくなら ば、一日ならいいん だ、と決まらせた。

古稽寒に徹した克己

感想文特集

一年生は二月一日から四 日間、早朝の寒中訓練で精 神と体を鍛えた。若高の寒 稽古は昨年より初まり二年 目。その感想文を集めた。

やってよかった 寒稽古

二年八組 阿部正男

二月一日から寒稽古が 始まった。僕の家は若松なの で、学校からそう遠くない から、朝起きるのは、それ ほど苦にはならなかった。 朝六時四〇分に家を出る。そ の玄関をあけた時の寒さは、 今でも心に残っています。 道も冷たい感じがしました。 雨の降る感じは、それが 良かったです。

母に感謝

一年四組 稲垣 智

まず寒稽古の一番きつか ったのは、朝五時におき ないけなかつたことです。 五時四十分の始発のバスに 乗らなければ、ちとこにな ってしまうからです。それ が、朝五時半に起きて、始 発のバスに乗るのは、とて も寒くて、眠たいの直前 から、宿題とかいろいろ

一年生は二月一日から四 日間、早朝の寒中訓練で精 神と体を鍛えた。若高の寒 稽古は昨年より初まり二年 目。その感想文を集めた。

母に感謝

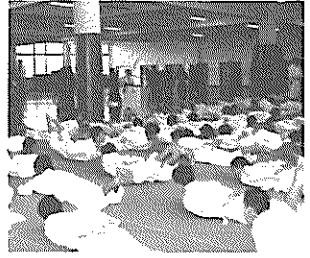
一年四組 稲垣 智

まず寒稽古の一ばんきつか ったのは、朝五時におき ないけなかつたことです。 五時四十分の始発のバスに 乗らなければ、ちとこにな ってしまうからです。それ が、朝五時半に起きて、始 発のバスに乗るのは、とて も寒くて、眠たいの直前 から、宿題とかいろいろ

生かしたい体験

一年四組 斎藤正幸

僕は、寒稽古の体験が 普通生活に戻ったが、あ からの春の便りを送る。そ して、これからの、「自分 に 勝つ」といって、自分を 励ます。先生の話が今も耳に残 っている。



高校新聞記者

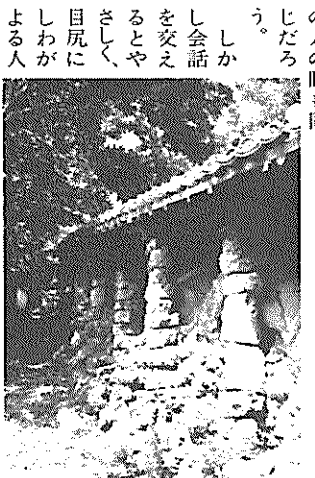
沖縄見たまま

国際コミュニケーション年の記念企画「高校新聞記者・沖縄理解と交流の翼」(全日空・沖縄県観光協会・琉球文化社、日本旅行、西日本新聞、琉球新報など共催企画)の招待で沖縄を訪れた本校新聞部の特派記者は精力的に研修視察のスケジュールを消化し、つばさに沖縄の現実を見聞した。沖縄の戦後はまだ終わっていない。その現状を新鮮な高校生目で見てもいい。ここに、地理的、歴史的、民族的、文化的な位置からしても多くの教材と問題を提示する沖縄はぜひ訪れてもらいたい。修学旅行地。とする地元沖縄の期待は強く、本土高校生へのラヴ・コールも大きい。

本土とはちがう風土 失われる沖縄を惜しむ

窓から下界が見える。青い海と、エメラルドグリーンの珊瑚礁。南の海だ。那覇空港が見えて来た。目が痛いほどの日射しだ。空が青い。熱気が漂う。空が高い。沖縄だ。道に咲く赤いハイビスカス。南国の島だ。一言。街行く人々もなせかしら熱い空気をかきながら歩いている。風の色。匂い。柔かさ。やはり沖縄だ。古い沖縄の姿を見たい。壺屋に行く。壺屋は古くからの焼きものの町。四〇〇年前からの窯元もあると云う。訪れる途中、様々なものが目に映り感動する。屋根瓦。朱色の頑丈な造り。厚い壁。石畳の細い路地。もう一つの沖縄を見た気がする。本土とは違う。民族、カルチャー(文化)以前の風土の問題だろう。毎年台風が襲うこの地。さて、話を戻して沖縄の陶芸に目を通そう。

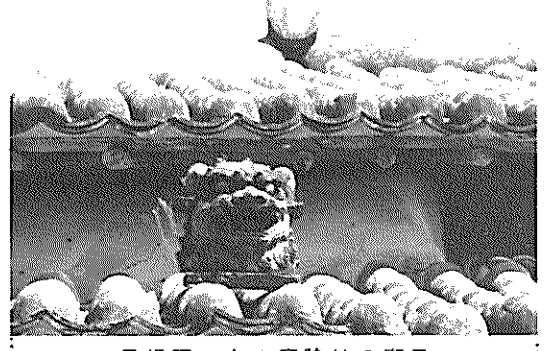
古くは琉球王朝時代にシヤムから伝来したという記録もあるが、秀吉の朝鮮出兵によって朝鮮、中国ほか薩摩藩経由で北からの伝来により、一段と技術の高まりを見せたという。つまり沖縄の陶芸は南蛮焼、中国、朝鮮の陶芸の技よる人



南風薫跡(壺屋)



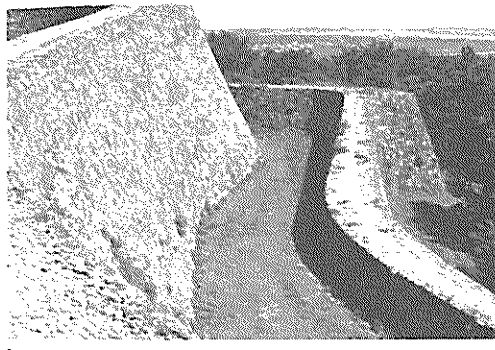
カジマルの樹の下に400年前の陶片が……



屋根瓦の上の魔除けの獅子



琉球王朝の雅びを偲ばせる琉舞



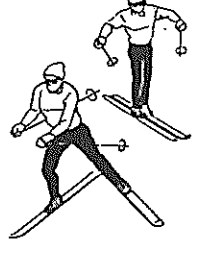
スペイン風の城壁、座喜美城

修学旅行見直しの動き

北(スキー旅行)から南(沖縄)へ180度

ひとつ、高校の修学旅行といえば圧倒的に黒四ダム・富士五湖・東京と廻る関東旅行や、京都・奈良を訪ねる関西旅行であった。それが昭和四十年代には、霧島や阿蘇、九重などへのキャンパススタイルの山岳旅行が主流となり、五十年代に入ると、信州へのスキー研修旅行と形を変えた。本校でも四年連続で志賀高原へのスキー旅行である。ところがここ数年の傾向で、県内一校の県立高校中、約三〇%が沖縄への修学旅行となり、スキー旅行から南の島・沖縄への転換が相次いでいる。

沖縄の言葉も、本土の奈良古く沖縄を残しておきたいというのには本土の人間のおがままかも知れない。便利などは本心で便利にする。だから本土の誤りを、美しい沖縄でも起してしまつたのだと思つた。古い沖縄の心が失われることはとても悲しいことだ。この街は動き、発展する。今日もまた、多くの観光客を飲み干し、吐き出し、



思い出の修学旅行 感想文集

ダイヤモンドスノー 零下二〇度の体験

二年九組 橋口 真由美



二年九組 島田 純子

雪で光るのです。リフトの順番を待っている時、銀の粉が降っているのに気付いたのです。はらはら、さらさら、本当に軽く降ってこられるのです。その銀の粉がそこいらに飛び散り、それぞれが生きた生き物と輝きを放っています。私は思わず前に進むことを忘れて、その銀色の光景に魅せられてしまいました。あとで聞くと、それがダイヤモンドスノーだったのだ。ヤモンドスノーに比べれば、減りが見られないので、雪景に、いつかまた同じ場所に出逢いたいものです。ところで、初めてスキーをしたとき、初めてスキーをしたとき、初めてスキーをしたとき、初めてスキーをしたとき……

原稿募集 磯原新聞は学校内の主な出来事や日常の部活動、生徒会活動などのほか、個人研究や生徒一人一人の思潮などにもスポットをあてる。あなたの新聞です。詩、レポート、写真など募集。